

ミニデイ【おとこの台所 桜新町だより】

発行責任者 桜新町広報：柏木君夫、岡元正史

◎ 保科正之 (1611～72年)。

初代徳川将軍である家康の孫で、二代秀忠の子、三代家光の腹違いの弟である。

幼い正之は信濃国高遠（たかとう）藩、保科家の養子となる。

異母弟の存在を知らない家光は、鷹狩りのとき、休息した寺の住職から正之のことを聞き及ぶ。対面後、家光はこの謹直で有能な弟を気に入り、可愛がり重用し、のちに陸奥国会津藩23万石の初代藩主に引き立てる。



保科正之は、死の床にあった三代家光から直々に、幼い家綱の後見役を託された。

◎ 明暦の大火～徳川幕府の江戸復興。

明暦三年（1657年）の大火は、徳川幕府の開府以来の未曾有の大災害だった。

ときの徳川将軍は、数え年17歳の四代家綱。

将軍家綱を支える幕閣は、大坂の陣で大将を務めた元老格の井伊直孝（68歳）、関ヶ原を戦った元大老の酒井忠勝（71歳）、島原の乱の総大将「知恵伊豆」こと老中松平信綱（62歳）の歴戦の古参たち。一方、会津藩主の保科正之（47歳）、のちの老中阿部忠秋（56歳）は、一世代若く戦さの経験がない幕閣だった。

天守、本丸御殿、二の丸が焼け落ちたなか、幕閣の江戸の復興案は意見が割れた。

保科正之ら、若手の幕閣は、

- ① 幕府の備蓄米から、急場として粥施行（炊出し）。② 町の再建のため、御金蔵（軍用金の備え）の被災者への貸与や給付。③ 火除け地（防火帯）、町火消し（時代劇で馴染みの「め組」）など防災対策。④ 隅田川で避難者の焼死と溺死が多かったので、避難路のため両国橋など橋（交通路）の架設…、等を実行した。市中の復興が落ち着くと江戸城に着手する。議論は天守の再建問題であった。古参の幕閣は天守の再建を主張したが、保科正之は、優先して財源を江戸の復興に充てるべきと、天守の再建を「停止」（古参に配慮し、中止でなく停止）した。現在の皇居（旧江戸城）には、天守台だけが残り、天守は再建されていない。若手幕閣の意見が通ったのは、当時の徳川政権の風通しが良かったからである。保科正之は両国に、諸宗山無縁寺「回向院」を建立し、「明暦の大火」の犠牲者を身分や貧富の差別なく手厚く供養した。

「明暦の大火」は、「武断政治」から「文治政治」への大きな転換点となった。

参考：「保科正之－徳川将軍家を支えた会津藩主」（中村彰彦著）

2月の定例会 参加者は2日（木）14名、10日（金）14名でした。

3月の定例会 2日（木）、10日（金）です。